田村志津枝さん コラム

PICK UP MOVIE

『マミー』

11/22~

[2024年／日本／119分]
監督：二村真弘

事件の渦に
監督も巻き込まれ
私も巻き込まれ

和歌山カレー事件、と呼ばれる事件があった。1998年7月、夏祭りに町内会でカレーを作ってふるまった。すると67人が食中毒にかかり、うち小学生を含む4人が死亡した。原因はカレーに混入していた猛毒のヒ素だった。事件の衝撃以上に多くの人の記憶に残っているのは、犯人と目された林眞須美宅に押し寄せたマスコミの熱狂ぶりではないか。脚立に上って家の中を覗き込む記者たちに、ホースで水をかける林眞須美の姿が繰り返しテレビで流された。林夫妻は保険金詐欺容疑で逮捕され、さらに林眞須美はカレー事件の殺人容疑で再逮捕される。2009年に死刑判決が確定した。

本作『マミー』は、二村真弘監督が、林眞須美は冤罪ではないかと聞いたのをきっかけに、事件をゼロから調べ直したものだ。だが一方でこの作品は、関連する人物たちをじっくりと描き出していて、一般的なドキュメンタリー作品とは別種の、よく練られたドラマにも似た感慨を与えてくれる。

私を含め多くの人は、事件当時の過剰な報道のなかで林眞須美が犯人とされた時点以降のことは、ほとんど知らない。今になれば、あの騒ぎはいったい何だったのかと戸惑うほど、マスメディアはその後ぱたりと報道しなくなったからだ。だが驚いたことに、二村監督の綿密な取材によって明らかになっていくのは、林眞須美の死刑判決の根拠となった目撃証言にも、使われたとされるヒ素の鑑定にも、多くの疑義があるということだ。ならば重要な論点であるはずの、犯罪の動機はいったい何なのか。

これについては、作品全体がさまざまな角度から考えさせてくれる。林眞須美が家族にあてた膨大な手紙から選りすぐられた幾つかのナレーションが、死刑囚として生きる彼女の心境を的確に伝えている。また真相究明の過程に絡み合わせて、冒頭から終幕までたびたび登場する夫の健治と長男も、一筋縄ではいかぬ心惹かれる存在だ。健治は極めてあけすけに保険金詐欺のいきさつを語る。淡々とした語り口なだけに、ありきたりの価値観など吹っ飛んでしまいそうだ。またカレー事件によって11歳で両親から引き離された長男は、死刑囚の息子として苛酷な日々を送ってきたに違いないが、その冷静さには心を打たれる。彼らを通してあらためて、家族とは何だろうとの思いを深くした。

事件から現在までの出来事を追い、関連人物を次々取材する複雑な物語が、心に沁みる風景でつながれているのも、この作品の大きな美点だと思う。それに導かれるように語られていくエピソードは、私たちをこの社会の闇の深淵へ、そして人間の計り知れぬ内面へと引きずり込まずにはいない。ドキュメンタリー作品の持つ思わぬ力に気づかされ、新たな可能性が開かれそうな予感がした。

プロフィール
田村志津枝：ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた　1977 年にファスビンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983 年からホウシャオシェンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。